ベテルの「高き所」を求めて
―テル・ベイティン遺跡(パレスチナ自治区)及びその東の宗教遺構における考古学的一般調査―

杉本　智俊　慶應義塾大学教授

Looking for the High Place at Bethel: General Surveys at Tell Beitin, Palestine, and the Religious Site in its East

SUGIMOTO, David T.　Professor, Keio University

1. 2022年度調査概要

慶應義塾大学西アジア考古学調査団は、2012年からパレスチナ自治区ベイティン村において考古学的調査を行っている。ベイティン村は旧約聖書の町ベテルと同定され、村の各地に多様な性格の遺跡が散在している(**図1**)。

村の北側に位置するテルには、移行期青銅器時代から鉄器時代(旧約聖書時代)の町が存在し、20世紀中頃にケルゾー、オルブライトらによって発掘調査が行われた。テルの東西には谷があり、南側で合流してワディ・タワヒーンを形成している。西の谷にはビザンツ時代以来大型の貯水池が設置され、ワディ・タワヒーンは農地として利用されてきた。西の丘には、移行期青銅器時代からビザンツ時代の墓域が広がっており、すでに慶應隊によって調査が行われた。テルの真東、東の丘の上には、遊牧民のものと思われる独立した宗教遺構の存在が知られている。その南には、ブルジュ・ベイティンという別の遺跡が存在し、慶應隊の調査によってビザンツ時代の大型教会堂が発掘された。その後、十字軍～マムルーク朝時代には、この地は塔を伴う農業集落となったようである。

2022年度の調査は8月6日～11日に行われ、これまで慶應隊による本格的な調査がなされてこなかったテル及び東の宗教遺構を対象とした。コロナ禍のため過去3年間調査が中断されており、本年度も調査隊を組織することがかなわなかったので、発表者が単独で一般調査のみを行うこととしたが、資料整理には国際

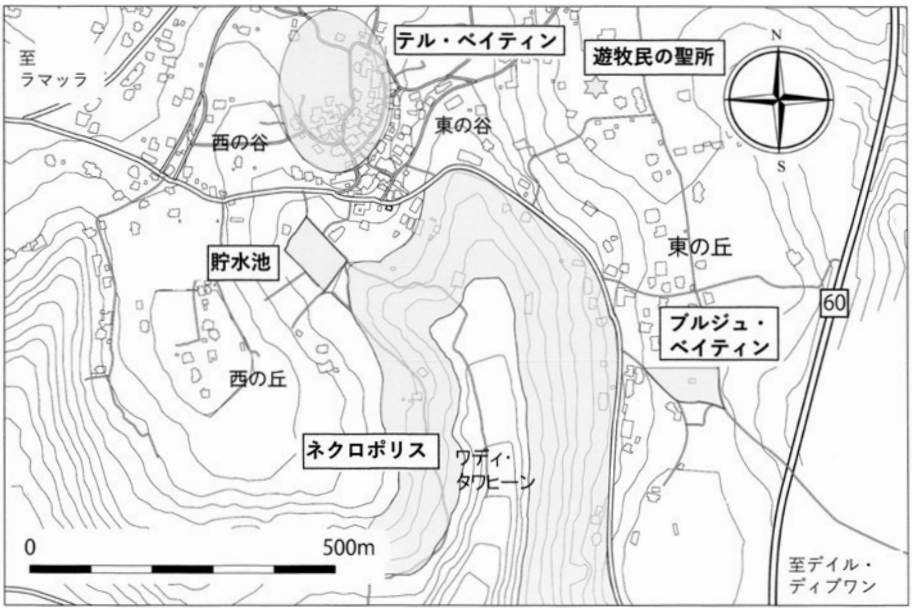

図1　ベイティン村における遺跡分布

文化財株式会社の鳥越道臣、慶應義塾大学の加藤紘が協力し、地形図作成は中部大学の渡部展也が行った。尚、テルの表面調査はすでに2012年及び2019年にも行ったことがあるので、今回はそれらの成果も併せて報告する。

2. ベイティン遺跡と聖書のベテル

ベテルの町は、旧約聖書時代の代表的な宗教都市として知られている。特に重要なのは、①アブラハムなど族長時代の聖所と②分裂王国時代の「高き所」である。

①の時代には、族長アブラハムが北メソポタミアから南レヴァントに移住し、「ベテルの東」に祭壇を築いたとされる（創世記12章8節）。その孫ヤコブは「ベテル」で石を枕にして寝た際「天の梯子」の夢を見、その場に石の柱を立ててベテル（「神の家」の意）と呼んだとされる（創世記28章10-22節）。②の時代、すなわちダビデ・ソロモンによるイスラエル王国が分裂した後（鉄器時代Ⅱ A 期後半、前10世紀末）には、北王国イスラエルの王ヤロブアムがベテルとダンに国家聖所として「高き所」を作り、金の子牛を置いたとされる（Ⅰ列王記12章25-33節）。これらの聖所は聖書の視点では誤りとされ、無名の預言者によって非難されたが、その預言者は殺害され、祭儀は継続したことも記されている（Ⅰ列王記13章32節）。

これらの記事の歴史性についてはさまざまな見解があり、それぞれの聖所は存在しなかったとする説もある。しかし、現在でも多くの研究者たちはこれらの記事が何らかの文化記憶に基づいているとしており、そうすると、各聖所の存在と性格を検証しないわけにはいかないであろう。それらはイスラエル宗教の成立に大きな意味を持つからである。

慶應隊は、東の丘上のブルジュ・ベイティン遺跡からすでに「ヤコブの石」を記念するビザンツ時代の教会堂を発見しており、同教会には金の子牛を非難して殺された預言者の墓もあったことが同時代の巡礼たちによって伝えられている。この教会堂はあくまでビザンツ時代の信仰を反映したものであるが、それ以前からの伝承に基づく可能性も考えられる。聖書には、ヤコブの出来事は「ベテル」で起こったと記されており、「ベテルの東」でないが、ブルジュ・ベイティンがその場所だとすると、それは町の外で起こり、そこが「ベテルの東」だと理解されたことになる。そうすると、テルの東側に位置する遊牧民の聖所はこの出来事とどう関わっていたのであろうか。このような「ベテル」と「ベテルの東」の関係性の解明も、これらの出来事を正確に理解するためには重要な課題である。

3. テル・ベイティンにおける一般調査

まずテルでは、②のヤロブアムの高き所が存在したのか、したとするならどのような性格のものだったのかを解明することが大きな目標であった。存在したとするなら、「高き所」はほぼ確実に町の中にあったと思われるが、ケルゾーらはそれらしき遺構を検出していないからである。また、鉄器時代の「高き所」は、先行する青銅器時代のカナン人の聖所（神殿）を基礎としていた可能性も考えられ、その場合、それがヤコブの夢と関連していたかもしれない。しかし、そのような神殿の存在も、これまでの所確認されていない。

本調査では、まずUAVを用いてテル全体の微地形測量を行い、ケルゾーらの調査区をそれに重ねて遺構の分布を確認した（**図2**）。彼らはF、G、N地区から中期青銅器時代に建造された市壁、L地区から同時代の市門、A地区から鉄器時代の大型建物を検出しており、市壁によって囲まれた町の範囲を想定している。しかし、本調査隊の作成した段彩図によると、テルの西側に市門らしき構造が確認され、その北側はケルゾーの想定より西側まで市域が広がっていたことが推定される。その西側では、地表調査で斜堤らしき構造も認められる。そうすると、ケルゾーらのE地区の西側、テルの最高標高地点（「北西地区」と呼ぶ）は聖所を築く可能性が最も高い地点であるにも関わらず、未調査であることがわかる。

この北西地区のみを対象に5㎝等高線図を作成すると、一見平坦に見える地区に若干盛り上がった地域が認められ、地下の遺構を反映している可能性が考えられる（**図3**）。想定される遺構は約17ｍ四方の正方形のもので、その南東側から突き出した施設があったように見える。正方形の高台とそこに上る階段は、すでに発掘されているダンの高き所の基本構造であり、規模もほぼ同じである点は、非常に興味深い。ダンの場合、階段の前には前庭と祭壇が存在した。

本年度と2019年度に行った遺物の表面採集では、北西地区の南東部（グリッドN12）において宗教的な遺物が集中する様子が確認された（**図4**）。七枝のランプは、後のユダヤ教のメノラーと関連すると思われ、ダンの高き所でも知られている。牛の形をした石偶は「金の子牛」を想起させ、精巧に作られたダチョウの

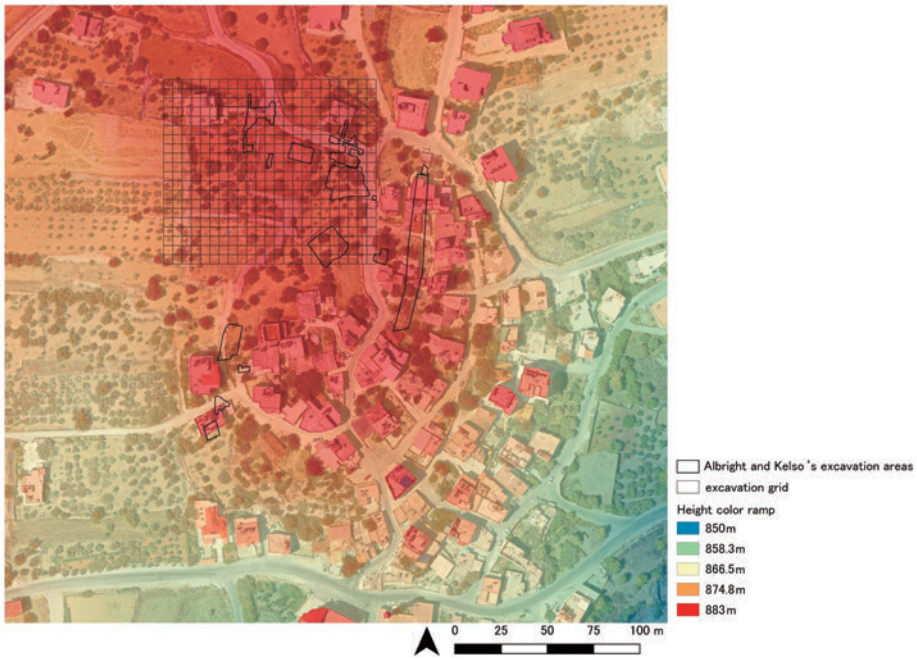

図2　テル・ベイティンの段彩図（渡部展也作成）

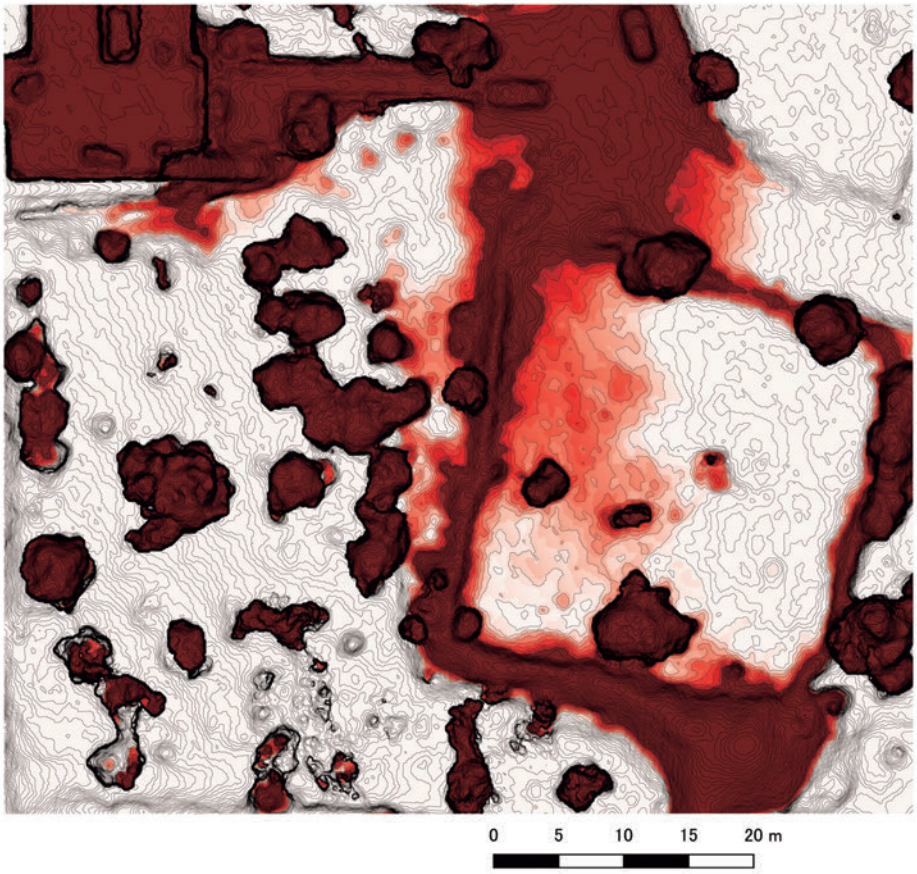

図3　テル北西地区の等高線図（渡部展也作成）

図４　テル北西地区グリッド N12 表採遺物

卵形の石は、後のシナゴーグにおいてダチョウの卵が天井からぶら下げられる習慣との関連で興味深い。グリッド N12 は、上述の遺構の推定が正しければ、祭儀活動が行われた前庭の祭壇の位置にあたり、整合する。ケルゾーも、本調査体のグリッド L9/10 から祭儀台の出土を報告している。この北西地区については、まだ発掘調査が行われていないので断定的なことは言えないが、これらの宗教遺物の集中は、この場所に重要な宗教施設が存在した可能性を示唆するものであろう。

2012 年度の表面採集は、テルの北西地区及びテルのふもとにあたるモスク西側で行ったが、厳密な採集地点は記録していない。北西地区では前期青銅器時代、鉄器時代Ⅰ期、ⅡA 期、ⅡB-C 期、ヘレニズム期、十字軍～マムルーク朝期の遺物が確認された。興味深い点は、鉄器時代ⅡB-C 期の土器が圧倒的に多いものの、あきらかに鉄器時代ⅡA 期の土器も数点認められたことである。高き所の歴史性に否定的な研究者たちは、「高き所」は鉄器時代ⅡB 期以降のもので、ヤロブアムは建造しなかったと主張しているが、この結果は少なくとも鉄器時代ⅡA 期の居住を否定できないことを示している。

一方、中期・後期青銅器時代の土器片が１点も認められなかった点も注目に値する。モスク西地点ではそれらの時代の土器片も認められたので、その時代の居住はあったはずであるが、北西地区ではほとんど確認されない。「沈黙からの議論」なので断定的なことは言えないが、テルの北西地区に鉄器時代の宗教遺構に先行する大型の青銅器時代の神殿等が存在していた可能性は低いと言わざるを得ないであろう。

4. テルの東に位置する宗教遺構における一般調査

テルの真東には、岩の上を円形に穿った施設で、一般に遊牧民が地下水等を祀ったとされる宗教遺構が調査開始時から認識されていた（**図 5**）。しかし、この遺構には円形に穿たれた石だけでなく、より精巧に矩形に穿たれ、石柱か何かの基礎として使用されたような巨石も見られる。また、その巨石の西側には大きな矩形の構造が接続しているように見える。

図５　テル東に位置する宗教遺構全景

本年度は、この遺構の性格を確認するため、SfM による測量調査と表面採集を行った。測量調査の結果、本遺構は約 15 m 四方のほぼ正方形をしており、残存状況はよくないが、３段構造をしていた様子が確認された。岩盤をそのまま利用した箇所もあるが、あきらかに人工的に加工された箇所も認められる。矩形に穿たれた石はその東端に接していたが、もう一つの丸く穿たれた石はこの遺構から若干離れていた。遺物はほとんど存在しなかったが、ヘレニズム期と鉄器時代ⅡB-C 期の土器片、よく研磨された白い石の壺の把手が採集された。これだけから年代を決定することは難しいが、この遺構は最近の遊牧民のものではなく古代に遡る可能性が想定されるであろう。

本遺構とよく似た遺構は、ゲゼル遺跡においてマカリスターが報告している。その遺構も正方形で三段をなしており、石柱の台が接していた。遺物はほとんどなく、年代決定もできていないが、ジックラトとの関係が指摘されているのは興味深い。聖書の伝承では、北メソポタミアから移住してきた遊牧民の族長たちが祭壇や石の柱を立てたことが記されている。ベイティンの遺構の年代は不確かであり、残存状況もよくなく、断定的なことは言えないが、このような遺構が「ベテルの東」に存在し、少なくとも鉄器時代（イスラエル王国時代）まで使用の可能性が遡ることは、注目に値する。

「ベテルの東」は、聖書の中でただ方向を示すのではなく特定の地域を示す言葉として何度も言及されている。東の丘上のブルジュ・ベイティン遺跡からヤコブの寝た石と預言者の墓を記念する教会堂が発掘され、その北側に遊牧民の聖所が存在したことを考えると、東の丘全体が聖なる地域として特別な意味を与えられていたのかもしれない。その場合、テルは都市活動の中心であり、西の丘は死者の町(ネクロポリス)となる。そうすると、ブルジュ・ベイティンは、実際はテルの南東にあるにも関わらず、「ベテルの東」とみなされた理由も理解できる。「東の丘」はテルの真東から始まって南側に続く一つながりの地域であり、ブルジュ・ベイティンはその南側に位置するからである。また、「ベテルの東」はアイ(エッテル、あるいはヒルベト・マカーティルと同定される)の西にあったともされるが、ベテルの町(テル・ベイティン)はこれらの遺跡の北西に位置する。これも「ベテルの東」が南北に長い地域を指していたとすると、よく理解できる。

■参考文献

・Arie, E. 2008 Reconsidering the Iron Age II Strata at Tel Dan: Archaeological and Historical Implications. *Tel Aviv* 35, 6–64.
・Finkelstein, I. and L. Singer-Avitz 2009 Reevaluating Bethel. *ZDPV* 125, 33–48.
・Gomes, J. F. 2006 *The Sanctuary of Bethel and the Configuration of the Israelite Identity* (BZAW 368), Berlin and New York.
・Kelso, J. L. 1968 *The Excavation of Bethel* (1934–1960) (AASOR 39), Cambridge, MA.
・Keonen, K. 2003 *Bethel. Geschichte, Kult, und Theologie* (OBO 192), Fribourg, Gottingen.
・MaCalister, R. A. S. 1912 *The Excavation of Gezer,* 1902–1905, 1907–1909, vol. 2, London.
・Pakkala, J. 2008 Jeroboam without Bulls. *ZAW* 120, 501–525.
・杉本智俊　2014「ベイティン(ベテル)遺跡における考古学的調査の課題」『聖書学論集』46号61–82頁。